

平成14年1月30日

各関係機関長 様

高知県病害虫防除所長

病害虫発生予察情報について

平成13年度病害虫発生予察特殊報第3号を送付します。

平成13年度病害虫発生予察特殊報第3号

平成14年1月30日

高知県病害虫防除所

病害虫名 土佐文旦、日向夏^{みきぐさればいよ}の幹腐病 (*Lachnum abnorme* (Montagne) Haines & Dumont)

1. 特殊報の内容 土佐文旦・日向夏で本邦初発生を確認

2. 発生場所 葉山村(土佐文旦)、土佐市(日向夏)

3. 発生作物 土佐文旦、日向夏

4. 発生確認の経過と発生状況等

(1) 土佐文旦

- ① 当該農家では4～5年前から、文旦樹の枝幹部が腐敗し、病斑部に子のう盤形成が見られ始めた。その後病斑は漸増し、現在では4a(20本)、8a(60本)の2ヶ所のほ場で、大半の樹に程度の差はあれ病斑が見られる。
- ② 平成13年3月、須崎農業改良普及センターが現地調査において採取したサンプルを病害虫防除所に持ち込み、農業技術センター病理科に診断依頼をしたが、病斑部の子のう盤は前年度発生したもので、子のう胞子は確認できなかった。そのため、梅雨明けまで現地ほ場における新たな子のう盤の形成を待ったが、形成は見られなかった。
- ③ 同年8月、農業技術センター病理科において、病斑部からの病原菌の分離同定の結果、本病は幹腐病であることが確認された。

(2) 日向夏

- ① 平成13年5月、土佐農業改良普及センターより、子のう盤が形成された日向夏の罹病枝の診断依頼があった。罹病枝は当該農家のほ場で剪定指導中に発見されたものである。
- ② サンプルは病害虫防除所に持ち込まれ、農業技術センター病理科に診断依頼をした結果、病斑上の子のう盤及び子のう胞子から、幹腐病と確認された。
- ③ その後、当該ほ場を詳しく調査したが、罹病枝は発見されなかった。

※なお、県内ではユズにおける同病害が多発し、問題となっている。県外ではユズの他、スダチ、ダイダイ、温州ミカン、ポンカン、ジャバラでの発生が確認されているが、今回新たに、土佐文旦と日向夏での発生が確認された。

5. 病徴と被害

極初期の症状は2年生枝から見られ、枝幹部に乾いてやや陥没した径1～2mmの丸い褐色の枯死斑で、皮を剥ぐとわずかに木質部まで達している。病斑は年とともにゆっくり拡大し、木質部にも広がって、すり鉢状または溝状の凹みを生じる。病斑から上部は徐々に衰弱し、隔年結果が激しくなってやがて枯死する。ただ、病斑の進展は大変遅い。病斑上には、春～初夏(4月中旬～7月上旬)と秋(9月下旬～12月)に、盃状で直径1～2mmの黄色い子のう盤(キノコ)が形成される。キノコは晴天が続くと白く干からびる。

6. 病原菌の諸性質

本菌は子のう菌類に属し、子のう盤上に形成される子のうはこん棒状で、中に8個の無色、ひも状の子のう胞子が形成される。

本菌の菌糸生育適温は20℃付近で、5℃でわずかに生育し、30℃以上では生育しない。子のう胞子の発芽適温も20℃付近で、30℃以上ではほとんど発芽しない。

7 感染と発病

本病は病斑上に形成された子のう盤(キノコ)から放出される子のう胞子により伝染する。主な感染時期は雨が多く、高湿度でやや低温の時期、すなわち6月～7月上旬の梅雨期や9月下旬～10月上旬の秋雨期であると推察される。その理由としては子のう胞子の飛散が4～7月に多いこと、接種試験で接種部を接ぎ木テープで密閉するなど湿度を保たないと発病しないこと、降水量の多い地域で多発していること、子のう胞子発芽適温が15～25℃であることなどである。また、本菌は何らかの原因でできた傷口や新芽が出るときの樹皮の亀裂等から侵入するものと考えられる。

8 耕種の防除

本病は樹勢低下や過湿条件により発病が助長されると考えられることから、過度の着果、強剪定、密植を避けるとともに、罹病枝を取り除き、主幹部等で剪定できない病斑は削り取って、伝染源となる子のう盤(キノコ)を生やさないようにする。そのほか、できれば苗木の育成は本病の発生していない地域で行うこと、また、幼木期においても定期的な薬剤防除に努めることも必要である。

9 薬剤防除

本病に対する登録薬剤は今のところないので、3月の剪定時(子のう盤の形成前)に、子のう盤の形成阻止効果の高い有機銅塗布剤(枯れ込み防止剤として登録あり)を、患部に塗布する。この場合、できれば病斑を削り取ってからの処理が望まれる。さらに、4月中旬～7月上旬や9月下旬～10月上旬の感染期に、感染防止効果の高い有機銅水和剤、ジチアノン水和剤、ベノミル水和剤、フルアジナム水和剤、マンネブ水和剤、(そうか病あるいは黒点病防除剤として登録あり)等を、そうか病、黒点病防除を兼ねて概ね2週間間隔で、5～6回薬液が幹に十分付着するよう丁寧に散布する。

図 1 : 土佐文旦における病斑

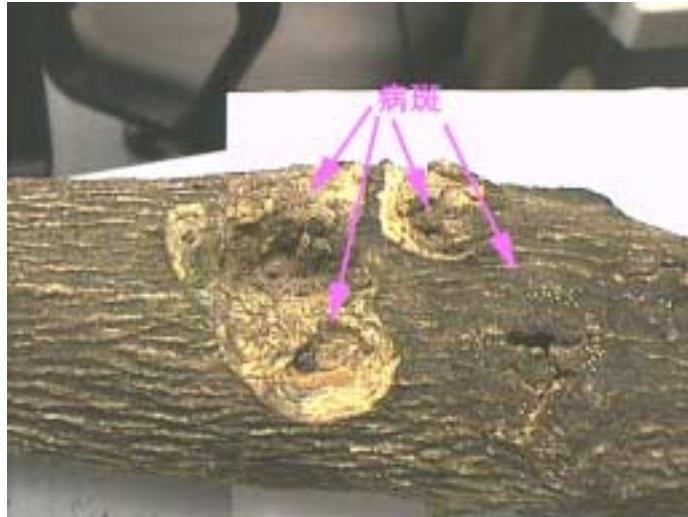


図 2 : 病斑内部に形成された子のう盤 (土佐文旦)



図 3 : 樹皮に形成された子のう盤 (土佐文旦)

